蓑島球友会 7年ぶりV

全日本クラブ野球

社会人野球の第38回全日本クラブ選手権大会（毎日新聞社、日本野球連盟主催）最終日は9日、埼玉・西武ドームで準決勝と決勝を行い、前回準優勝の和歌山蓑島球友会（和歌山）がミキハウスREDS（京都）を2―0で破って7年ぶり2回目の優勝を果たし、近畿予選を勝ち上がった2007年以来、5大会ぶり3回目の日本選手権大会（10月28日開幕）出場を決めた。

和歌山蓑島球友会―ミキハウスREDS　優勝を決め、抱き合って喜ぶ和歌山蓑島球友会の選手たち＝久保玲撮影

2年連続で近畿勢が顔を合わせた決勝は、和歌山蓑島・三宅悠、ミキハウス・万谷の両エース右腕が互いに譲らぬ投手戦となった。和歌山蓑島は八回、2死から浦川、高橋孝、山口の3連続長短打で2点を挙げ、接戦を制した。

表彰選手は次の通り。最高殊勲選手＝三宅悠投手（和歌山蓑島球友会）▽敢闘賞＝山田秋親投手（ミキハウスREDS）▽首位打者賞＝山口貴樹内野手（和歌山蓑島球友会、16打数9安打、打率5割6分3厘）

「信頼」の遺訓 接戦で生きる

1996年の創設から顧問として和歌山蓑島球友会を支えた尾藤公・元箕島高監督（2011年死去）は常々、「チームワークとは、信頼だ」と話したという。名将の遺訓を接戦となった決勝で体現した。

0―0の同点で迎えた七回、三宅悠は先頭打者に四球を与えた。両チームを通じて、初めての四球は、試合の流れを変えかねない。だが西川監督は「マウンドに行く場面ではない」と判断した。バッテリーを信じた。次打者は3球で追い込み、外角いっぱいの速球でバントを封じて見逃し三振。盗塁を試みた走者を捕手の水田が強肩で刺した後、チェンジアップで空振り三振を奪って乗り切った。

三宅悠にとって、「信頼とは、個々が責任を果たすこと」。「投手の責任は、皆が気持ち良く守り、打てるように投げることだと思う」。その力投に内外野は再三の好守で応え、八回には3連続長短打で決勝点をもぎ取った。【藤倉聡子】

和歌山蓑島		打	安	点
④	高橋孝	4	2	1
⑥	山口	4	2	1
⑦	山下	4	0	0
③	藤田	4	0	0
⑤	児玉	4	1	0
⑨	大北	3	0	0
D	上田	4	1	0
②	水田	3	0	0
⑧	浦川	3	1	0
	計	33	7	2

ミキハウス		打	安	点
⑥	築山	4	0	0
⑤	河野	4	1	0
④	中本	3	3	0
⑧	陣田	4	1	0
D	青山	2	0	0
HD	辻田	1	0	0
②	金田	3	0	0
⑨	村上	3	0	0
③	脇山	3	1	0
⑦	畠山	0	0	0
7	山下	3	0	0
	計	30	6	0

	振	球	犠	盗	失	残	併
和	6	1	0	1	0	5	1
ミ	6	2	0	0	0	5	1

投手	回	安	責
三宅悠	9	6	0
万谷	8	7	2
山田	1	0	0

▽三塁打　山口▽二塁打　上田、浦川▽2時間7分

▽準決勝

MSH医療専門学校（広島）000000001―1

ミキハウスREDS（京都）102000000X―3

（M）中村―松浦（ミ）山田―金田

水沢駒形倶（岩手）100000000―1

和歌山蓑島球友会（和歌山）01010001X―3

（水）高橋徳、馬場、松本利―玉城（和）黒川―水田

▽決勝

和歌山蓑島球友会　000000020―2

ミキハウスREDS　000000000―0

全日本クラブ野球

練習環境充実 躍進

決勝進出の近畿勢

9日閉幕した第38回全日本クラブ野球選手権は、2年連続の近畿勢同士による決勝で和歌山蓑島球友会（和歌山）がミキハウスREDS（京都）を破り、7年ぶり2回目の優勝を果たした。2014年から前年優勝チームの所属地区の代表数を1増とするため、来年の西近畿地区の代表枠は2となる。

東西から各1代表が出場する近畿勢は10年連続の決勝進出、3年連続の優勝。地域差、雇用先や練習場所を確保している新進チームと従来型チームとの差が鮮明になった。

和歌山蓑島球友会は1996年創部。地元のスーパーマーケット「松源」などが選手を雇用。チームはNPO法人として市民球場の管理運営を担い、練習場所を確保している。ミキハウスREDSは立命館クとして04年結成。05年に企業チームのミキハウスが廃部となり、選手の一部が加わったのが縁で08年に現名称に変更した。ほとんどの選手がミキハウスで働き、同社グラウンドを利用する。

両チームに共通していたのは「クラブ選手権は日本選手権の予選であり、目標は日本選手権での1勝」という高いモチベーション。それを裏付けるように、投手力や守備力などにおいて抜きんでていた。【藤倉聡子】